

ヒュームの情念の分類における間接情念の位置

真船 えり (Eri Mafune)

日本医療科学大学

ヒュームは『人間本性論』第二巻「情念について」の冒頭において情念を、「激しい」と「穏やか」、「間接」と「直接」に分類する。ヒュームはそこで、間接情念すなわち誇りと卑下、愛と憎しみを、情念の「激しい」方に分類する。本論文はヒュームの情念論において間接情念はどのような位置にあるのかについて考察することを目的とする。この考察が必要であり重要である理由は、間接情念がもし道德感覚であるならば、あるいは少なくとも道德感情と関係があるのであれば、それは穏やかな情念でなければならない、という論争がヒューム解釈者たちのあいだにあるからである。つまり、間接情念が情念の「激しい」方に分類されていることと、間接情念が道德感情であることとは整合的ではない、ということである。したがって間接情念は激しい方に分類されることはありえないし、道德感情でもありえない、と主な解釈者たちは考える。

しかしながらヒュームは、『人間本性論』第三巻「道德について」において、道德に関連した文脈で間接情念に3回言及している。その一つは以下のようである。

ある行為が有徳あるいは悪徳であるとき、その行為は、ある性質あるいは性格の標徴としてのみ有徳あるいは悪徳である。有徳あるいは悪徳と言われるいかなる行為も、心の持続的な原理に、すなわち全行為の上に及んで個々の人物の性格のうちに入っているような持続的原理に、依存しなければならない。いかなる恒常的原理からも生じない行為それ自身は、愛または憎しみに、あるいは誇りまたは卑下に、なんの影響も及ぼさない。したがって、道德性において考察されることはけっしてない。(傍点強調引用者)

伝統的には、ヒュームの情念の分類を知覚（観念と印象）の分類とともに図式化して提示したのはケンプ・スミスであった。またケンプ・スミスは、ヒューム哲学の源泉としてハチソンの哲学を取り上げて、「穏やかな欲求」について論じた。

その後、間接情念と道德感情との関係について最初に問題提起したのはアーダルである。アーダルは主たるヒューム解釈者から反論されたがそれに応答した。

それでは、ヒュームは『人間本性論』の情念論において間接情念をどのようなものとして論じているのであろうか。「穏やかな」と「激しい」の用語法について、私は一つの仮説的な解釈を提出する。そのために私は、17-18世紀の情念論の論じられ方とヒュームの論じ方を比較検討し、間接情念が道德感覚あるいは道德感情と関係するとすればどのようにしてであるかを検討する。そして、それらの考察によってヒュームの『人間本性論』の情念論における間接情念の設定についてひとつの解釈を提案する。